
そら

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そら

【著者名】

Z5333A

霧夜

【あらすじ】

事故で家族と足を失い、空に憧れた“彼女”と、“彼女”を助けたいと思った“彼”の話。

彼女の願い（前書き）

珍しく暖かい話を書きました。 読んでもらえると嬉しいです。

彼女の願い

空を飛びたいと、ずっと思っていた。

見上げる空、そこでは一羽の鳥が旋回を続けていた。
無知な私には、あの鳥が何といつ名前の鳥なのか解らない。
でも空を飛んでいるだけで、ひどく素晴らしい存在に思えた。

あせこよつと上に行けたら、皆に会えるかも知れない。

幾度と無く、そう考えた。

その考えに確証などどこ何も無くて。
でも私はそれに縋るしかなかつた。

私を置いて、何処かへと旅立つてしまつた私の家族。

対向車線から外れ、私達の乗る車へと突つ込んできたトラック。
一緒に乗つっていた父と、母と、弟と、そしてトラックの運転手。
私以外の皆が、いなくなつてしまつた。

私は頼るべきものと恨みをぶつけるべき存在を同時に失つてしまつた。

事故の所為で松葉杖を突かなくては歩けなくなり。
明るく笑う術をどこかに置き忘れた。

そんな私には、空を望むしかなかつた。

空には、家族がいるかもしけなかつたから。
空を飛べば、足など不用になるから。

でも私に翼なんか無い。

飛行も浮遊も出来はしない。

方法があるとすれば、屋上から飛び降りるへりこのものか。

だがそれは落トであり転落だ。

落ちて いるだけ。飛んで いるとは言え ない。

なら、どうすれば良かつたのだろう。
何が、最善の方法なのだろう。

事故の事を忘れれば、家族を裏切つたよつた気持ちになる。
空を諦めれば、血りを支えるものを失つてしまつ。

なら。

私は一体、どうすれば。

ねえ、誰か。

教えて下さいませんか

苦しいんです。

心が締め付けられて。

悲しいんです。

独りぼっちになつて。

憎いんです。

全てを奪われて。

解らないんです。

頬を伝うこの零の意味が。

痛いんです。

動かなくなつた足が疼いて。

声が嗄れるほどに叫んで。

泣いて、しまじそうなんです。

立つてられません。

力を無くした私の足では、膝を折る事しか出来ないんです。

お願い誰か。

一人では、答えを見付けられないんです。

一人で生きるには、世界は広く、一生は長過ぎるんです。

どうか私に、支えを下さい。

何にも隔たれない場所を行く鳥達が羨ましいんです。

太陽が瞳に眩しいよ。

空をどじまでも、飛んで行きたいよ

彼の想い

僕は彼女を助けたいと思った。

家族を失い、足と心に深い傷を負った彼女を。

傍で見ていた僕には解った。

彼女が無理をしている事は。

いつも笑っていたけれど、その心が限界に近いのは理解できた。

彼女は気付いたら空を仰ぎ、鳥をじっと見つめていた。

空に憧れていたのか。

家族に会いたかったのか。

足を使わなくともいい場所へ行きたかったのか。

それはよく解らない。

全て間違っているかもしれないし、全て正解かもしれない。

定かではない考えだ。

でも彼女が、苦しみ、悲しみ、憎み、迷い、痛みを感じていたのは、僕にも察せられた。

彼女はずっと、笑顔で泣いていたんだ。

倒れる寸前だったのに、必死で自分の足を立たせていたんだ。

無理なんて、しなくても良かつたのに。

泣いたって、誰も責めたりしないのに。

涙の存在は、格好悪くも無様でもないのに。

彼女は、とてもとても頑張り屋だったんだ。

自らの心に嘘を吐いてしまつほどだ。

それも、自分すら気付かなければ。

だからあまりにも痛ましい姿の彼女を、助けたいと思つた。
手遅れになる前に。

はつきり言つて、僕には何も出来ない。

彼女を家族に会わせる事も。

彼女の足を治す事も。

彼女に空を飛ばせてあげる事も。

非力にも程があるだろつ。

それでも僕には、この両手がある。

倒れても迷つても、必ず手を差し出してみせる。

彼女の肩を支え、彼女の杖になれるんだ。

“代わり”なんていう都合のいい言葉を使つつもりは毛頭ない。

僕は僕の力と遣り方で。

彼女を、支えてあげるんだ。

僕のこの想いに、偽りなどないのだから。

彼女の願いも僕の想いも、きっと果たされる。

空の下で

雲一つない蒼穹の下で。

果たされるのは。

迷い続けてきた願いと、偽りのない想い。

彼は彼女に会いに行つた。

自らの誓いの元。

誰かの、大切な人の力になる事を決意していた。
自分にどれ程の力があるのか知らなかつた。

しかし非力かもしれないが無力ではないと。
ただ強く信じていた。

手を差し伸べた先に、彼女がいた。

彼女は空を見る事をやめた。

空を、諦めたわけではない。

自らが望んだ空はここにある事を、理解したからだ。
空の向こうに家族がいるのか定かではない。

でも眼前には確かに人が存在していて。
その人の手を掴んだ。

視線を向ける先に、彼の姿があった。

頭上を旋回する鳥を見上げ、二人は寄り添っていた。

頬を緩やかに撫でていく風は心地好く。
太陽の光は柔らかく降り注ぎ。
透き通る空は全てを享受していた。

そこにはただ、優しさがあった。

自分にも何かが出来るのだと、彼は悟った。
翼なんかいらなかつたんだと、彼女は知つた。

一人より二人が。

誰かに大事だと言う事が、言われる事が。

これほど大きな力になると。

二人は胸の内で、静かに受け止めていた。

心中に溢れる気持ちは快いもので。

これががあればいつまでも大丈夫なんだと。

二人は全身で、ありのまま受け入れていた。

繋いだ手は暖かく。

傍らの存在は力強く。

肯定すべきものだった。

青く深い空はそこにあり。
その中を鳥は飛翔する。

行く鳥、帰る鳥。
回る鳥、進む鳥。
単独の鳥、家族の鳥。

蒼い世界に、ただ飛翔する。

頭上を仰ぎながら、一人はそつと。
繋いだ手に、力を込めた。

願いと想いが叶った事を。

彼と彼女は、感じていた。

絵のトド（後書き）

時々自分で恥ずかしくなつたりしながら書きました。読んで下さつて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5333a/>

そら

2010年10月28日04時53分発行